

活動プロセスとプログラムおよび活動の特徴

-石打における『まちを学校にする』活動に関する研究1-

梶島 邦江(聖徳大学短期大学部)

1. 研究の目的

新潟県塩沢町石打¹⁾では、1985年以来、子どもの環境づくりを目ざした活動が続き、現在は『まちを学校にする』というテーマでの活動が行われている。本稿はこの『まちを学校にする』活動の実践プロセスとプログラムを整理し、そこで試みられている新たな地域社会と教育(学校)との関係づくりについて考察を加えたい。

研究対象地域である石打は、新潟県南部に位置し、昭和24年に石打丸山スキー場を開設して以降、40年足らずの間に、貧しい寒村から上越有数のスキー観光地へと大きな変貌を遂げた地域である。地域内には石打・関・上野の三つの区組織と、石打区を主な範域とした石打丸山観光協会があり、その他、子どもに関する組織では上関小PTAお

よび石打区の子ども育成会がある。

2. 活動のプロセス

活動は上関小学校教師3名との「地域学習研究会」に始まる。観光化に伴って自然環境や伝統的な空間は損なわれ、「子どもの生活にも屋内化・個人化が進む中で、地域に対する認識は乏しく、愛着も浅い」²⁾ことに不安をいだきつつも、「学校で自分が行っている地域学習も、石打のことを何も教えていない」(当時メンバーの発言)ことが動機となり、「子どもが生きる石打を教える」を目的に研究会は出発した。

その後、地域住民を加えメンバーの数を増しつつ、活動目標も地域学習から学習のための教材づくり、子どものトータルな環境づくり『まちを学校にする』にまで拡大してきたが、一貫して自主

的・主体的な活動として営まれている。現在は会員24名の「上関の子どもと地域を考える会」が活動母体である。この間の活動経緯は、表1に示す通り。

- 1) 当該地域の上関小学校区を通称しての石打。
- 2) 梶島他編著「石打に育つ」石打丸山観光協会発行昭和61年10月

表1 活動経緯

(活動内容および活動成果は、平成5年8月時点)

年月	主体	背景と動機	目標	活動内容	成果
85年 4月	地域学習研究会 会員6名 (教師3名) (在外者3名)	子どもが地域を知らない ・地域への愛着が薄い ・地域学習で他地域を教えている ・自分(教師)も地域を知らない ・石打の地域学習をしたい	石打に根ざした地域学習を行う	・学習プログラムの開発 ・地域資料の収集 [学習] 石打に関する学習実践 ・フィールドワークを用いた学習 ・親を招いての学習発表	子どもを通して親が地域学習に関心をもった 子どもの地域に対する知識に幅がでた
90年 10月	地域学習を考える会 会員9名 (教師2名) (住民4名) (在外者3名)	住民と一緒に地域を考えたい ・リアルな地域を知りたい ・実践を通して親が学習を認知 ・学校のためなら手伝っても良い	地域学習を発展させる ・地域資料をストックする	・地域学習の継続 [聞き取り] 情報の持ちより交換 [学習] 老人への聞き取り ・老人の授業参加	話しを聞いた老人達が大量、喜んでくれた ・老人の話しに全く耳を傾けていない現実を知る ・系統的な資料収集と適切な教材の必要性を認識
91年 11月	子どもと地域づくりを考える会 会員16名 (住民10名) (教師3名) (在外者3名)	今、歴史的な資料を収集しておかなければ、永久に失われる ・スキー場以前を知る老人たちが存命のうちに生きた資料を ・系統的な資料収集が必要である ・学習教材としても使える資料を	地域副読本「まちの謎解きブック」の製作	・地域学習の継続 ・老人からの聞き取り [聞き取り] 水路や果樹の現地調査 [ブック] ウォークラリーの開催 [学習] 越後正を聞く会の開催 [文化財] 謎解きブックの製作	・40年前が別世界になっていることを自覚 ・老人からの情報収集の緊要度を認識 ・実体験の学習効果を確認 ・体験場や空間装置、道具が眼前で失われる危機感 ・資料保管の必要性を認識
92年 11月	同上 会員24名 (住民17名) (教師2名) (在外者5名)	歴史的資料情報収集が緊急に必要である ・資料情報を整理し将来にわたって保管しなければ ・話や歌、技や芸を記録化したい ・地域体験をもっと与えたい ・体験を促す空間や建物、道具や樹木などを保全したい	「まちを学校にする」	・「まちの謎解きブック」を用いた地域学習実践 [聞き取り] 生きたライブラリーの製作 [ブック] 地域文化財(材)の指定 [文化財] ワークショップ型イベントの開催 [イベント] 老人の聞き取り継続	・イベントを行うことで既成組織との繋がりができ、組織間も連絡可能になる ・イベント参加者が地域の善さ美しさを再確認 ・イベントを契機に、新たな育成会結成の動きがでてきた

3. 『まちを学校にする』プログラム

『まちを学校にする』は四つの意味側面を備えている。その一は「地域を教材にする」こと、すなわち自分たちの住んでいる地域を学びの対象にすることである。その二は「住む人、あるモノが先生」。子どもたちがまちを学ぶ際に、手掛りを与えてくれるのは住民であり、まちに実在するモノや空間であるという意味。その三は「地域が教室」になること、すなわち体験しつつ地域を学ぶこと。その四は「学ぶ機会やきっかけを地域住民が積極的につくり出す」ことである。

これらの理念を具体化して現在6活動が実行段階にあるが、各活動の詳細は次報以降に譲り、ここでは以下の三活動について簡潔に紹介したい。

●『まちの謎解きブック』の製作 地域学習の教材として編集され、伝統的な空間や装置、スキー場や山、伝説や子ども行事などを題材に、生態系に則った暮らしの安全性と景観の美しさ、共に暮らすためのルールと楽しさ、自ら造ることの愉快と誇り、等を伝えようとしている。

●地域文化財（材）指定 地域に現存する伝統的な空間や装置、道具などを地域文化財に指定し保全を図るとともに、伝統的な生活技術や知識を保有している人を地域文化材に指定。自信をもって子どもに伝えてもらうことが意図されている。

●「生きたライブラリー」づくり 地域資料や情報を整理・保管して、地域学習やイベント等に必要資料・情報を随時提供することを目的としたもの。地域文化財（材）の所在や意味はここで記録化、一部の生活技術はビデオ映像として将来へ受け渡すことが予定されている。

各活動の関係構造は、図1に示す通りである。

4. 『まちを学校にする』特徴

1) 地域と学校との協働活動

第一の特徴は、地域と学校との実質的な協働活動として営まれていることである。

学校での地域学習のために住民が教材を製作したり、学習を生き生きさせるためのイベントを開催する一方、学校でのフィールドワーク型学習は、

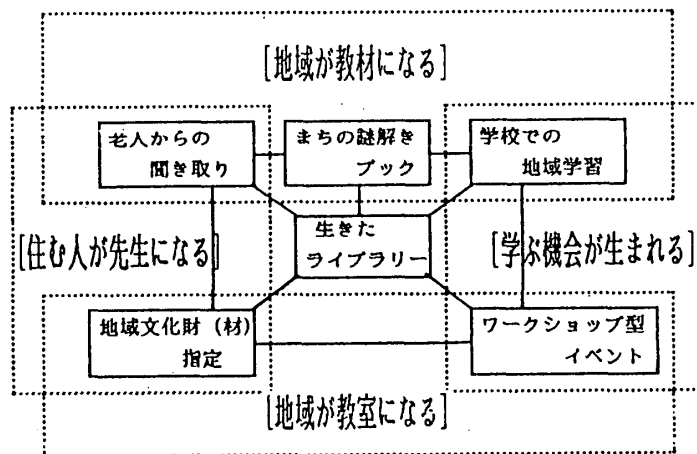


図1 「まちを学校にする」活動シエーマ

親の地域への関心をよび覚まし活動を活発にする。学校が一方向的に地域を学習の対象とするのでもなければ、地域が学校にただ協力するのでもない、地域と学校との対等でしかも相互刺激・補完的な関係が、この活動を通して培われている。

2) 地域組織をつなぐ活動

第二の特徴は、この活動が既存の地域組織を横に“つなぐ”働きを持っているという点である。

既存の地域組織は、成立期の動機も薄れ、半ば義務的に活動を継続してきた面が強い。しかも地区間の不均衡という地域独自の事情もあって、これまで地域全体での活動は行われてこなかった。

こうな状態にある各組織に対して、イベント等での協力を積極的に働きかけ、協同作業機会を作ることで組織間の風通しを良くし、既成組織を活性化することが試みられている。

このような地域組織の横つなぎは、「考える会」が新たな地域組織であり、既成の枠組に囚われないですむために実現できた。

3) 人づくり・コトづくり・場づくりの連動

第三の特徴は、『まちを学校にする』はソフトとハードとを内包した活動であるという点である。

子どものための環境づくりを、教育環境の整備（教材の製作等）に止めることなく、地域の実体験を促すコト（イベント）づくりや情報環境の整備、「地域文化財」指定による物的環境保全をも含む、多面的な活動として展開している。

これはメンバー構成の多様さに、負うところが大きい。